

# イソハエトリのすむ磯

## ■大磯新記録のイソハエトリを確認

1992年5月13日、照ヶ崎海岸にクモを探しに出かけた。海岸は太陽の照り返しが激しく、乾燥しやすい環境だが、ハエやウミユスリカ、フナムシなどクモの餌となる虫は決して少なくない。海岸に並ぶテトラポットは一見、自然とは縁遠い風景だが、よく見るとコンクリートの壁面を自由自在にはね回っているクモがいた。イソハエトリだ。何頭もいる。大きいのも小さいのもいる。こんなにたくさんいるのに、なんとこのクモは大磯町で一度も記録されたことがなかった。クモに関心を持つ人がそれほど少ないということだ。イソハエトリは活発で、白と黒の雄々しいクモである。風化してできたくぼみに糸製の住居を作り、もぐりこんでいる。卵のうちうもそんなくぼみに作っていた。もともとイソハエトリは磯浜の岩の割れ目に住み、その周辺で生活していた。イソハエトリにとっては、テトラポットは単なる新しい岩でしかないようだ。

生態については小林・関口（1976）報告がある。産卵時期は5月上旬から9月上旬までにわたる。5月に調べた記録では1個の卵の中の卵数の平均は21個（8個～40個）だったという。母親は卵のうちを守っているが、親が死んでも子グモはちゃんと生まれて卵のうちから出ることができる。個体間の威嚇誇示行動も簡単に報告されていた。第1脚を斜め前方に挙げて威嚇し、脚の長い方が勝つことが多いという。雄と雄だけでなく、雄と雌、雌と雌の間でも闘争が起こったという。

照ヶ崎ではこの日、他の海岸性のクモを見つけることはできなかった。

## ■真鶴半島のシマミヤグモ

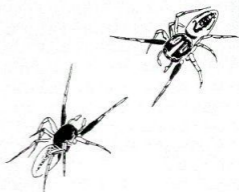
海岸性のクモとしてはイソハエトリの他にイソタナグモ・ヤマトウシオグモ・シマミヤグモなどが知られている。6月22日、真鶴町の三ツ石海岸でシマミヤグモを探す。磯に接した道のわきの崖地（地表から40cm程度の高さしかない）に小さな孔を見つけた。シマミヤグモの横孔住居である。すぐ近くの下草の間には独立生活を始めたばかりのジョロウグモの幼体が網を張っている。シマミヤグモの巣孔は直径が数ミリしかなく、糸で内側が裏うちしてある。フタはない。ひとつ見つかり、それをきっかけにどんどん見つかるようになった。向い崖には10cm<sup>2</sup>の範囲に6個も孔があった。ひとつを堀り出してみた。シマミヤグモはミヤグモの近縁種で腹部が細長く、第3脚が前方を向いているのが特徴だ。巣は体の大きさに合わせて作っており、1cmそこそこの深さしかなかった。中のクモはあまり活発ではない。巣孔の入口から脚先を出していることもあるようだ。ミヤグモでは孔から放射状に出される受信糸は、シマミヤグモではほとんど見えない。受信糸に触れた虫を飛び出して来て捕らえるというが、まだその瞬間を見たことがない。海岸に住んでいるせいかな、乾燥に強く、小さいビンの中で飼育しやすい種類である。産卵、親子関係、生活史といった面白そうなテーマがあるが、まだ誰も調べていない。

潮間帯の磯に降りると、イソハエトリが元気に歩き回っていた。す早く歩くコモリグモがいた。採って調べてみると、河原や海岸によくいる、キシベココモリグモの雌だった。岩礁地帯ではイソタナグモを探したが、発見できなかった。たぶん探し方が悪かったのだろう。以前にはいたのだから。また今度、潮の干いたときに探してみよう。イソタナグモは千葉県以南の海岸の岩場で、満潮線付近のれきの間や岩のすき間に管状住居を作り、入口から柵網を張り出すクモである。

海岸のトペラの葉先にはアシプトヒメグモが住んでいる。海岸のクモの生活もけっこう面白いテーマだが、たまらなく暑い！（池田博）

文献 小林好生・関口見一 1976

Atpus . (68) : 29-38.



▲誇示行動（右は斑紋のはっきりしない個体）



▲シマミヤグモ（真鶴半島）HI



▲イソハエトリ HS